
おにのこ

原木野徹也

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

おにのこ

【Nコード】

N2371M

【作者名】

原木野徹也

【あらすじ】

とある夜のこと、一人だった男の子は山に住む鬼と出会いました。出会いと、別れ。母と子。家族とは何か。そんな深くて難しいことなんてわからないけれど、ぼんやりとしたものが伝わりますように。

月の大きな夜だった。

見上げれば、落ちてくるのではないかと思うほど白く輝く大きな月が六番目のあとを着いてくる。寄り添ってくれているような安心感もあったが、見張られているような息苦しい恐怖も感じる月だ。六番目はぶるりと身を震わせてまた前へと進み始める。

山は深く暗かった。木々の隙間から月光が白く洩れてはいるが、それは道を照らしてはくれない。何度もつまずき、折れた枝に皮膚を切られても、六番目は立ち止まらなかった。

ここが正しい道なのか分からない。道であるのかすらも分からない。戻る道も、先に何が潜んでいるのかも、何もかも分からない。それでも、六番目は進んだ。

山には鬼がいる、と今よりもっと小さなころに語り聞かせられたことがあった。

山には鬼がいて、入り込んだ人間を皆喰らってしまうのだと。特に鬼は子供が大好きだから、絶対に山へ入ってはいけないよ、と。これを聞かせてくれたのは母だけれど、一番目の兄も何度も言っていた。入るうえにもお前じゃまだ無理だろうけど、と笑いながら。

だから、六番目にもよく分かっていた。山に、しかも夜中に入り込むことがどれだけ危険であるか、よく分かった上で、今日、入り込んだのだ。

意外にも足はすいすいと進んだ。坂道はきついが、歩けないことはない。まるで誘い込まれているようだと思う。どうやら山の鬼と言うのは本当に子供が好きなようだ。

(……なら、早く喰らってくれりゃあいいのに)

村へ帰るつもりはない。帰れなくていい。だって、六番目はいな

くつつたつていい存在なのだから。

ああ、でも一番目の兄は心配するかもしれないな。
してくれたらいいと思う。そうならば、少しは救われるだろうか。
どちらにしろ、もう関係ないことだ。

「あー！」

飛び出した木の根につまずき、六番目は地面に転がった。小石が
手のひらに刺さる感触に顔をゆがめる。起き上がる気力がない。思
った以上に身体は疲労していたようだ。

仰向けに転がって、大きく息を吐く。このままここで寝てしまっ
たら、鬼が来てくれるだろうか。

まっすぐ見た先に大きな月が見えた。まだついてきていたのか。柔
らかな金の光に、六番目はそっと目を閉じた。

ゆっくりと瞬きを繰り返すうちに不思議なことが起こった。

月が、二つ……いや、三つある。大きなまんまるい月と、鋭いけれ
ど優しい、小さな光るものが二つ。

「ヒトの子」

透きとおった声が耳朵を震わす。二つの光はどうやら瞳のようだ
った。

「転んだのか。立てるか？」

声が降りてきて、六番目の身体を抱き起こす。着物やひざについ
た土ぼこりを、白く細い手が払ってくれた。

「血はで出ないな。どうした、迷い込んだのか」

問いかけには応じず、しゃがみ込んで視線を合わせてくれているらしい相手の姿をよく見てみる。あたりは真っ暗だったはずなのに、不思議とよく見える。細められた金の瞳に向こうが透けてしまいそうなほど細い白髪、それと額部分には二つの突起がぼこりと姿を現していた。

「お、に……？」

どう見てもこの世のものとは思えない。六番目は今までにこんなにも美しく清らかで澄んだ存在を目にしたことがなかった。まるで光をまとっているような。ああ、だから辺りがこんなにも明るいのか。

「里の者はそう呼ぶ」

ほとんど思わずといった呟きだったが、白鬼は拾い上げ、答えてくれた。

「俺を喰うんか？」

「喰いはしないよ。それよりも、どうした。山に入るなどは言われなかったのか」

「言われとる。けど、今日は逃げてきたから」

鬼は人を喰い、子を好むはずなのに、どうしてこんなことを聞くのだろうか。不思議だ。分からない。分からないまま、なぜかすらすらと言葉が出てきた。もしかしたら誰かに聞いてほしかったのかもしれない。

「里ではおれが一番こまいから、おれは誰にも見てもらえんのんじゃない。他のみんなは働いとるから、仕方ないんじゃないけどな。でも、誰

も見てくれんから、おれのことなんて忘れとるから、おらん方がええんじゃないかって。……イチにだけは、会いに来てくれるけど……。だから、出てきた。その方が、飯もいらんし、おっかあたちも助かると思って」

里で六番目はほとんど軟禁状態だった。食事を忘れられるほど、いないといってもいい存在だった。他の兄たちも同じだったのかどうかは知らない。ただ里に六番目の存在はなかった。

もつとずっと幼いころは一緒にいてくれた母もいつしか見なくなってしまった。たしか、七番目の子が死んでしまっただろうか。柔らかく暖かだった手に、触れなくなってからどれだけ経っただろうか。

それに、もういいとも思っただのだ。元からない存在ならば、自分が消えたって誰も気にしないと、だからもういいと、六番目は初めて外に出て、山までやってきた。

「それにな、山の前まで来て、呼ばれた気がしたんじゃ。気のせいかもしれないけど、おいでって。こっちへおいでって、誰かが呼んでる気がしたから」

幻聴かもしれないけれど、それに勇気づけられたのだ。これでいいといわれているようで、安心した。そう言うとお白鬼は驚いた顔をして、それからまた微笑んだ。胸の奥が光がさしたようにむずがゆくなる。

「そうか、お前が……」

つぶやいた言葉を、六番目はよく聞き取れなかった。

白鬼は六番目の頭に手を伸ばす。指先に触れたかたい毛髪に眉を顰めるが、すぐに目を細めるとゆっくりと頭を撫でまわした。まる

でわが子をあやすように抱きしめて背中をたたくと、六番目の目から涙が零れ落ちた。それに一番驚いているのは六番目だ。これまで哀しいと思ったことはなかったのに。今だって、哀しくなんかないのに。あふれる涙を止める方法が分からない。

ぎゅうつと白鬼にしがみついて、六番目は嗚咽を漏らした。純白の着物に染みが広がっていく。白鬼はたいして気にした様子もなく、六番目をあやし続けた。

どうしてこんなにも安心するんだろうか。こんなにも暖かいんだろうか。出会ったばかりなのに、相手は鬼であるのに、六番目はここから離れたくなかった。人間相手に感じたことのないぬくもりが身体中に広がっていく。

「夜が明けてしまう前に、今日はもうお帰り」

六番目の涙がようやくおさまってきたころ、白鬼は六番目の頭をゆるりと撫でてそう言った。六番目はゆっくりと体を離し、赤くなつた瞳で縋るように白鬼を見上げた。白鬼はゆるりと笑む。

「夜が明けて、昼になったらまた来るといい。私はいつでもここに
いる」

夜は危ないから、と言って白鬼は立ち上がった。見上げる六番目の手を取って、歩き出す。

「麓まで送ろう」

六番目の足に合わせゆつくりとくだって行く。

六番目の手を包む白く細い手は意外に大きく、とても暖かった。ずっとここにいたいと思うのに、何度白鬼を見上げてもしそれを許してはくれなかった。

「……なあ、あんた、名前はなんて言うんじゃ？」

麓まで近づいてきたとき、ふと思い出したように六番目が問うた。

「おれはロク。本当は名前なんてないけどな、イチにはロクって呼んでくれる。だから、あんたもそう呼んでくれ」

六番目にとっては自分を認識する唯一のものだ。たった一つの大切なもの。

そうか、と白鬼は緩く笑む。

「名は、遠の昔に失くした。お前の好きなように呼べばいい」

「ほんとうか？」

とたん六番目は目を輝かせる。どうしようかと口を尖らせ考え込んでいた。

「んーと、な。じゃあ、シロが良い！ その髪がな、すごい綺麗じやから」

安直ではあるが、そのいとけない幼子らしい考えに白鬼は優しく微笑みかけた。くしゃりと髪を撫でつける。それから行こう、と促した。

木々がだんだんと薄まり、六番目はようやく平地に辿り着いた。

白鬼は山からは下りず、少し後ろで六番目が降り立つのを見ていた。

「ゆっくりと寝て起きたらおいで。ロク お前なら山は邪魔しないだろう」

六番目は名残惜しげに山を振り返ると、一度頷いて家へと走った。頭上には月が輝いている。どれだけ歩いて、いつまでもついてくる。最初はどこか恐ろしくもあつたその光が、今は暖かく感じる。

早く昼になれば良い。

どうせ昼はみんな外に出ているから、六番目がどこに居ようと気にしまい。たとえ見つかつて叱られようと仕置きされようと、いままら何でも乗り越えられると思った。

どうして今まで抜けだそうと考えなかったのか不思議で仕方ない。仕事に縛られない分、人に縛られない分、自分はこんなにも自由だったのだ。なんという皮肉だろうか。でも、それでいい。

音を立てないようそつと部屋にあがりこむ。部屋というにはあまりに粗末なその空間の隅に丸まり、薄い布つきれに包まる。布団とは呼べないが、ないよりはましだった。

早く昼になれば良い。

夜が明けて、日が昇って、昼になったら 自分は広い山の中で、自由に動き回れるのだ。

興奮している所為かなかなか寝付けなかった。何度目を閉じても山が気になって仕方がない。それでも、いつしか眠りは訪れる。

六番目は狭い室内にたった一人で丸まって、夜明けを待った。

一（後書き）

誤字脱字がありましたらご報告ください

山錦^{やましき}が散り、白く染まった山がまた深い緑をたたえだした頃、里にはまだ一度も、雨が降っていなかった。もうじき梅雨に入るころだというのに、空には雲ひとつ見当たらない。雨どころかまだ初夏だというのに焼けつくような日差しが里をおそっていた。

「もう畑のいくつかが駄目になつとる。こんままじゃあ、今年は何も採れんくなるぞ」

「早いとこなんとかせにやあ」

里では大人たちが集まって、日照りの現状を話し合っていた。どうにかしなければならぬ。このままでは里の者は皆飢饉で飢え死んでしまう。

そうならないためにもするべきことは一つしかない。皆、それは分かっていた。

「……善吉」

「はい」

里の長^{おさ}が一人の男に声をかける。

「……分かつとるな」

「はい。おりようにも、よく伝えときます」

長は長く息を吐く。答えた男の瞳には、何も映ってはいなかった。喜びも、哀しみも、怒りも、困惑も、絶望も。何一つ浮かびはせず、揺らめくこともなかった。何もかも覚悟のうえ。だから男はあれを見はしなかったし、愛しもしなかった。ただ気にかかるのは妻のこ

とだ。妻もあれを見はしなかったが、間違いなく腹を痛めて産んだのだから。気にかけているのは聞かずとも分かっていた。

「準備を」

長の一言に、皆が一斉に立ち上がった。

「ロク、こつちに来い」

ロクとは誰のことなのか。今の声は誰の物なのか。六番目は分からなかった。

白鬼とはあれから毎日のように会っている。霜の降りる日も白い雪を踏みしめて会いに行つたし、山桜を見ながらどこから白鬼が持つてきた木の実を食べたこともある。友達もできた。山の中は複雑で、面白くて、飽きることがなかった。

今日も今日とていつ抜けだそうかと考えていたら、声がかかったのだ。

ロクとは誰なのか。自分だ。それじゃあ、この声の主は誰だ？

低く響く声は男のものだとわかるが、一番目ではないようだ。聞いたことがない。ぱちぱちと目を瞬いて、ゆっくりと顔をあげた。見慣れない顔だった。だが、六番目はよく知っている。

父だ。

一度も自分を抱いてくれたことのない……いや、それどころか見てさえくれなかった父が己を呼んでいる。そのことに困惑し、状況がつかめなかった。

「何しとる。はよう来んか」

「あ、うん」

急かされ、何とか返事をして立ちあがる。父は六番目が立ち上がったのを見ると背を向け、歩きだした。

細い縁側を歩き、六番目は初めて他の部屋へと入った。そこは当たり前だが六番目のこもる部屋より広く、ここでみんなは過ごしているのだろうか。六番目は思いめぐらす。

父は部屋の奥へと進み、胡坐をかいて座った。その隣には懐かしい母の顔がある。いつしか見なくなった母の顔は、どこかしら沈んでいるようにも見えた。それでも、一度も六番目のほうを見ようとはしない。吸われ、と促され、六番目もおずおずと座り込んだ。

「お前には山へ行ってもらう。詳しくは母さんから聞け」

唐突に言葉は発せられ、そして終わった。それで父の用は済んでしまったのか、すぐに立ち上がると母と自分を残して出て行ってしまった。

六番目はまだ状況が飲み込めずにいた。どうして自分はここに呼ばれたのか。どうして母までここにいいのか。どうして母は哀しげなのか。父はなんと言っていたか。山へ行く？ 自分が？ どうして急にそんな話に。山へ通っていることに気づかれたのか。それともついに追い出されてしまうのか。そうなのだろうか。里に日照りが襲っていることは、六番目も知っていた。

それならそれでいい。山のほうが居心地が良い。

「ロク」

細く消え入りそうな女の声が耳に届く。母が相変わらずこちらを見ないままロクに呼びかけていた。

「父さんは忙しいけえ、代わりに母さんが話すからな。よう聞きんさい」

はい、と六番目は頷いた。

「里に雨が一度も降ってないのはしつとるね」

また頷く。

「こんままじゃあ、里のもんはみんな飢え死にしまつ。……山の鬼の話は覚えとるか？」

「覚えとる」

「あの鬼は里の守り神じゃ。あれがおるから里は守られる。けどあれは鬼と呼ばれる。なんで分かるか」

今度は首を横に振る。分からなかった。あの容姿からではないかとも思ったが、里のほとんどの者が白鬼を見たことはないのだ。これまでもそうだったろう。あの優しい白鬼がどうして人を喰らうといわれるようになったのか。六番目にはどうしても解せない。

「あれの力は永遠じゃない。使えば力は減っていく。力が減れば里に災厄が来る。じゃけえ、山に捧げるんじゃ」

なにを、とは母は言わなかったし、六番目も聞きはしなかった。だから自分は山へ行かせられるのだ。

「山と鬼は人を喰い、力をつけ、里を守る。あれは里の守り神じゃけんど、子を喰らう鬼なんじゃ」

だから山へ入ってはいけない。いつ鬼に出会って喰われるとも分からないからだ。

「……準備もある。山に行くのはまだ先じゃけ、よくわからんじやろうが部屋で待つとき」

また呼ぶ、と母は大きく息をついた。

六番目は立ち上がり、母に背を向け部屋を出る。母の顔をもっと見ていたかったが、どれだけ見ようと母が自分を向いてくれることはなかっただろう。

また部屋に閉じこもって、隅っこに丸くなる。山へ行こうか、と思ったけれどやめておいた。いつ母が呼びに来るか分からない。

山へ行ったら、今度こそ白鬼に喰われるのだろうか。でも、白鬼は肉を嫌っているようだった。じゃあ、一緒に暮らせるのか？ ずっと、あの心地よい場所にいられるということだろうか。

不思議な気分だ。

山に行くことはすでに習慣であるし、ずっと白鬼のそばにいたいと思っていた。喰われるのも別にかまわない。けれど、……素直に喜べなかった。不思議な気分だ。哀しくはない。痛くもない。けれど、嬉しい、とも言い難かった。久方ぶりに母に会ったからかもしれない。

母には考えろ、と言われたが、考えはまとまりそうにない。六番目は眠りにつくときのようにつづくまり、強く目を閉じた。

三

ロク、と呼ばれて六番目はのそりと起き上がった。

どれだけ時間がたったのだろう。日が沈んで、夜が明けて、もしかしたらもう一度それを繰り返したかもしれない。六番目はその間うずくまり、ほとんどそこを動かなかった。

破れた障子をあげた先には、母と一番目が立っていた。二人は六番目を確認すると歩き出す。六番目もそれについて行った。

この間の部屋に着くと座らされる。

「鬼じゃゆつても神さんじゃけえね。身体は綺麗にしとかんと」

喰われるならなおさらじゃ、と母は言った。相変わらず消え入るような細かい声だった。

「イチ。湯、沸かしてくれるか。後でロク入らせて、髪洗ったげえな」

一番目は頷いて、外に出て行った。一度六番目を見た目は悲しげで、苦しそうだった。

それを見送っていると、母が近づいてくる。母は六番目の着物を脱がせ、湿らせた布で腕を拭きだした。

「……山へ行くんは、怖いか」

「怖あない」

「そうか」

六番目は即答した。怖いはずがなかった。山は六番目の味方であるからだ。

「……お前が山へ行くんは、ほんとはずっと分かつたんよ」

六番目の方が一瞬びくりと跳ねる。山へ通っていることを知られていたのかと、ほんの一瞬だけ思ったからだ。けれど母の言った言葉を思い返して、そうではないと気づいた。母が言ったのは、山の生贄になることが分かっていた、ということだ。

母は六番目の反応を驚きと取ったのか、柔らかく身体を拭いながら話を続けた。

「時が来れば子を選ばれる。いつ選ばれるんかは分からん。けど、選ばれればすぐに分かる」

母の手の動きがはたと止まる。俯かされた顔はよく見えないが、触れた細い指先が細かく震えていることに六番目は気づいた。

「……お前が生まれたとき、お前の髪は真っ白だったんよ」

六番目のかたい髪に、白く細い指が触れる。白鬼に触れた時とはまた違う感触に、六番目はよく分からなくなった。同じ白く細い指。けれど、母のそれは柔らかかった。

「髪は一晚たつたら黒くなつとつた。じゃけど、それは明らかかな……、印じゃった」

いつかの将来に鬼へと喰われてしまう子。愛するにはあまりにも酷だった。父は初めから見ず、七番目が生まれてすぐに死んでから、母も諦めた。失うつらさを知ったからだという。大事にしているものか消えてしまうのがわかっていいるのなら、気に掛けないほうがいいと考えたのだ。

「お前はずっと一人の部屋じゃったね。……淋しかったか？」

六番目は首を横に振る。淋しくはなかった。

「おれ以外はみんな働いとるんじや。淋しかあない。仕方のないことじゃけ」

そうか、と母は頷いた。

「ロクは、ほんとにええ子に育ったねえ」

止まったままだった母の手が再び動き出す。先ほどよりも手つきが荒く、こすられる腕が痛いほどだった。

「お前が一人部屋だったのも、選ばれたけえじや。お前が綺麗なままにいれるよう、長がそうせえゆうてな」

確かにあの部屋は狭かったけれど、小さな六番目が一人で過ごすには広すぎるように思った。今いるこの部屋で他の皆が過ごすのならば、狭くて仕方がないだろうと思う。

母の唇が何か動いた気がしたが、漏れ出た息に音は含まれておらず、六番目には聞き取れなかった。

それきり、母は口を開かなかった。そのうちに一番目がやってきて湯が沸いたと知らせてくれた。母は六番目に触れていた手をそつと離す。来い、という一番目に頷いて、六番目は立ち上がった。

「……今日、行くけえね」

後ろでぼつりと呟かれた言葉に、六番目は静かにうなずいた。

風呂場まで連れて行かれ、着物を脱がされた。何度かけ湯をしてからそつと湯船につかる。

湯につかったのはいつぶりだろうか。もしかしたら初めてかもしれない。冷え切ったままの身体に風呂の湯は熱いくらいで、六番目の身体はすぐに真つ赤になった。一番目が頭の上から湯をかけ、固い髪を洗ってくれる。

「なあ、イチには知つとつたんか？ おれが山に行くつて」

「……知らなかった。おかしい、とは思つとつたけど……」

一番目は悲痛な面持ちでこたえる。六番目のことを家族の中で唯一気にかけてくれたから、今回のことで苦しんでいるのだろう。大丈夫なのに、と六番目は思う。決して口には出さないけれど。ばしゃん、ともう一度六番目の頭に湯をかける。

「……知つとつたら、母さん達にあんなことゆうてない」

あんなこと、とはどういったことなのか、一番目は話さなかったが、大体の見当はついた。一番目は誰より優しいから。

「イチにい。おれ、山に行くの怖くないよ。嫌でもない。じゃから、そんな顔せんで」

笑つたら、一番目は余計泣きそうな顔になった。六番目が我慢しているとも思っているのだろうか。だとしたら、一番目は間違っている。

一番目には、言ってもいいだろうか。一番目の考えが間違っているとはいえ、自分のせいで哀しい顔をされるのは嫌だった。

自分が山に入り、白鬼と仲良くしていることを言ったら、一番目の顔は変わるだろうか。……何も、変わらないだろうか。六番目が

何を言ったところで山へ入ることは変わらないのだから。

湯からあがり、ありがとう、と呟く。

「イチにい、ありがとお」

ずっと、気にかけてくれていて。

それを聞いて、一番目はあいまいに笑った。一度も行くなとは言わなかった。一番目も、分かっているのだ。

布で身体を拭いて上がると、真っ白な着物を着せられた。白鬼とおそろいのように嬉しくなったが、顔には出さなかった。

着物を着終わると、六番目はいつもの部屋に移された。だが、そこにはすでに母がいて、いつも一人きりで過ごしているそこに人がいることに違和感を感じてならなかった。

「夜に里を出る。それまで、寝ときんさい」

母に誘われ、六番目は母の腕の中にいた。柔らかな胸の感触とぬくもりにだんだんと六番目の意識がまどろんでくる。ゆるりゆるりと少し柔らかくなった髪をなでられ、心地良い、と思ってしまった。懐かしい、懐かしい、ぬくもり。山に行くことは怖くないけれど、少しだけ、心が揺れてしまった。

「ロク、ロク。ごめんな……」

六番目が完全に眠りに着く直前、母がささやいた。

（そんなこと、今ゆわんでくれ……）

見てくれなければ分らなかった。言ってくれなければ分らなかった。触れてくれなければ分らなかった。今更大切にされて、

どうしろと言っのだらうか。

六番目は母の着物を、きゅっと掴んだ。それしか、できなかった。

四

ふと目を覚ましたら、外はすでに暗くなっていた。ずいぶん長い間眠っていたようだが、母は自分を抱きかかえたままだった。きつと足もしびれているし、腕も疲れているだろう。負担をかけてしまったのは分かっていたけれど、今はまだ甘えていたい気分だった。

「ロク、起きたか」

「……うん」

「そろそろ時間じゃ。外ん出え」

こくりと頷いて、六番目は立ち上がった。そのまま縁側へと出る。外が明るいと思ったら、松明を持った一番目が待っていた。その向こうにはもつと大きな明かりが見える。

地面には真新しい草履が置いてあった。これを履いて出ればいいのだろう。六番目は縁側に腰掛け、慣れない草履を履いた。

一番目に促され、足を踏み出す。てつきり母もついてくると思ったら、母は縁側に立ったままだった。六番目の様子に気づいた母がゆるりと笑んだ。

「山までは、男しか行けんのよ。イチに連れてってもらい」

母は笑っていたが、目の下が赤かった。六番目は少しか進んでいた足を戻し、母に駆け寄る。一番目はそれを止めなかった。

「おつかあ、ありがとお」

母を見上げて、それだけを伝える。母の瞳が一瞬で揺らめいたが、六番目は一番目のもとへと走った。ちらりと泣き崩れる母の姿が

すめる。けれど、気にしてはいけなかった。

「行くぞ」

もう一度一番目に促され、今度こそ六番目は進みだした。

里の男たちの間に入る。火が眩しくて、目がくらみそうだ。周りを見渡してみるが、どれも同じ顔に見えてよく分からない。ただ、そのどれもが六番目を見なかった。

ぞろりぞろりと群れは動きだす。六番目も遅れないよう、一番目に促されながら歩き出した。

「……本当に行くんか」

ぼそりと、一番目は何やら呟いた。六番目は一番目を見上げる。

今更何を言うのだろうか。行きたくないとでもいえば、一番目は納得するのだろうか。行くのか、だなんて。

六番目には、山にしか居場所がないというのに。

そうしたのは、一番目を含む里の物だというのに。

「……そうするしか、ないじゃろ」

びたりと集団が足を止めた。六番目の人だけが割れた先には鬱蒼と茂る木々やシダが迫っていた。進むと一番目のみがついてくる。六番目が山に近づくにつれ、道が開いて行く。生い茂ったシダは下がり、垂れた枝はピンと伸びる。獣道とも呼べないそれはしかし、確かに道であった。

不思議な現象だが、六番目が山に来るたび起こることなので別段驚きはしない。だが、他の男たちは違ったらしい。小さなどよめきが駆け巡る。

そんな中、六番目はためらうことなく山へと向かう。道の奥に、

白く光る姿を見つけたからだ。久しぶりに見るその姿に、六番目の胸が熱くなる。

いらっしやい、と山が笑う。おいで、と誘われるままに、六番目は歩を進めた。

山に踏み入ったとき、六番目は思わず駆け出した。背後で山が道を閉ざしていく音が聞こえる。そのさらに向こうで一番目の、己を呼ぶ声が聞こえた気がした。だが、気にする暇も、必要もなかった。白い胸に飛び込むと、白鬼はしっかりと受け止めてくれた。

「シロ、シロ。なあ、これからずっと一緒に居れるんか？ おれ、ここで暮らしてええんよな？」

これまでふらふらしていた心が嘘のように固まった。どうして母のことなど気にしていたのだろう。自分がいるべき場所はここなのに。ここしかなかったのに。

母の哀しむ姿が気にかからないわけではなかったけれど、それよりも喜びで六番目の胸はいっぱいだった。

白鬼はゆるりと笑う。久しく触れる細い指先が心地よい。

「もちろんだ。ここは私と、お前の家なのだから」

ぼつり、と頬に何かが滴った。最初はどちらかが泣いているのかと思ったが、そうではないらしい。だんだんと水滴の数は増え、木の葉にあたり、さあさあと音を立て出した。雨が降ってきたのだ。

山へ子を捧げると天災が鎮まるというのは本当らしい。あんなにも長く続いていた晴天が、一気に雨へと変わったのだ。

「なあ、シロはおれが来ること、分かっとなんか？」

「誰かがやってくることは分かっていた。けれど、それがロクだとは知らなかったけれど」

お前でよかったと、白鬼は笑った。

それから雨がしのげる、おそらくは白鬼がいつも過ごしているであろう、岩場に移動した。ちよつとした洞穴の天井部の岩が張り出し、雨から守ってくれていた。くぼんだ洞穴の中は狭いが、二人くらいなら軽く過ごせるだろう。奥に灯された火は暖かいが、少しだけ痛かった。

「……多少の火は仕方ない。山も分かつてのことだよ。むやみに傷つけたりはしない」
「うん」

奥に入り込み、小さな炎から離れた所にうずくまる。その隣に白鬼が座り込み、丸まった背中を撫でられた。ほつと息を吐き、六番目は身体を伸ばす。

「眠くはないか」
「昼間たっぷり眠ったけえ、大丈夫じゃ。な、山のいろんな場所、もつと教えてな」

山に遊びに来ている間、六番目は白鬼と山にたくさんのことを教えられた。どの木がどこにあるか、どんな動物がいるのか、食べられる草や木の実、夕日がきれいに見れる場所。たくさん、たくさん教わった。けれどそれでも足りないくらい、ここにはまだ知らないことがある。この岩場もその一つだ。おそらく、他にも寝泊まりできる場所があるのだろう。まずは探索だと、六番目は張り切る。

白鬼は薄く笑い、頷いた。

「ああ、そうだな。だが、夜が明けてからだ」
「眠うないって」

「時間はまだある。今はゆっくり休みなさい」

そう言われて頭から頬にかけて撫でられると、眠くなってくるような気がした。白鬼の肩にもたれかかると、背を優しくたたかれる。まどろむ視界をそのままに瞼を落とせば、六番目はゆっくりと眠りの中に落ちていった。

五

おいで、と誘われた先には、大きな獣がいた。

今夜の寝床は大きな木の下で、蒸し暑くなってきたこの時期にはぴったりなほど風が心地よかった。近頃は毎晩ここで寝泊まりしている。この木は白鬼がことさら大切にされていて、時々声をかけるような仕草も見受けられた。だからなのか、六番目もここが一番落ち着き、安心した。

最近では山の声もよく分かるようになってきた。以前は一部しか聞き取れなかったが、今は耳を澄ませばたくさん言葉が聞き取れる。揺れる草から、舞い落ちる木の葉から、さざめく木々から、かすかに響く地面から。もちろん動物たちの声も、たくさん聞こえてくる。あまりにも多くて全部聞いていると頭がいっぱいになってしまふから、聞き流す方法も覚えていた。

朝から、今日はやけに静かだと思っていたら、目の前の獣が原因だったらしい。いつもそこらを駆け回っている狸や狐、鼠なんかはおびえて巣穴にもぐっているのだろう。

「お初にお目にかかります」

恭しく頭を下げ言った獣に、六番目は別段驚きはしなかった。動物の言葉を聞くことも、珍しいことではなかったからだ。その言葉が頭に浮かんでくるものであるのか、耳に届くものであるのかの区別など、六番目にはつかなかった。

獣は黒毛の、大きく美しいヤマイヌだった。この山のヤマイヌとは比べ物にならないくらい大きい。

ヤマイヌはクンと名乗った。本当はもう少し違う言葉なのだが、六番目にはうまく発音できなかった。何度か練習してみたのだがうまくいかず、それを見ていたヤマイヌがクンでいいと言ったのだ。

白鬼が言うには、ヤマイヌの一族は時折この地を訪れてくる知人らしい。今回はヤマイヌ一匹のみだが、季節によっては家族を連れてくることもあると言っていた。

「クンもずっと長い間生きとるんか？」

「主様ほどじゃありませんが、普通のものよりは長く生きております」

主というのは白鬼のことだった。動物たちは皆白鬼のことを主と呼ぶ。それはそのまま、この山を治める主であるからだろう。

「夕餉はクンと共にしようと思うが、良いか？」

白鬼の誘いに、六番目はもちろん頷いた。

昼間はヤマイヌの背中に乗せてもらい、山の中を駆け回った。この山に住む小さなヤマイヌも一緒だ。朝はおびえていた動物たちも、巣穴から顔をのぞかせていた。一番の仲良しである子ザルのナナも降りてきて、六番目の肩で笑っていた。

夕餉はいつもどおり、野草と木の実だけだった。客がいるといってもその辺りは変わらないらしい。

一度だけ、来たばかりのころに肉を出されたことがあるが、六番目はどうしても食べられなかった。口に入れて噛みしめるのだが、身体が受け付けないかのように吐き出してしまふ。無理しなくてもいいと白鬼は言ったが、六番目はそれでも食べようとした。「おれんために食われてくれとるんじゃから」と頑として聞かなかった。

結局その肉は山のヤマイヌ達が食べてくれた。六番目は何度も謝ったが、白鬼はそのたびにそれでいいと笑って答えた。それでいい、それがいいのだと。

それ以来、食事の際に肉が出てきたことはない。

ただ、今日ばかりはヤマイヌのために肉が用意されていた。己で

とつてきたのか白鬼が用意したのかは知らないが、六番目は嘆いたりはしなかった。それが「命」であるのだから。そういうものなのだから。自分だって、そうやって生きている。

「刻^{とき}が来るのですか」

火の向こう側で白鬼とヤマイヌが話している。聞こえてくる言葉は分かるが、それが何を意味して何を話しているのか、六番目にはよく分からなかった。聞いてはいけない内容な気がして、六番目は顔を伏せた。

白鬼が頷くのを見て、ヤマイヌは淋しくなる、といった。

「あれはすでに役目としての力を備えている。立派すぎるくらいだ」

淋しくなる、もう一度ヤマイヌが言って、白鬼もゆるりと頷いた。そろりと頬をなでる風が、なぜか胸に染みた。

夜のうちにヤマイヌは山から去って行った。もう少しいればいいのと言った六番目に、ヤマイヌは冬になったら家族を連れてくると約束をした。ヤマイヌの住む地は北の果てのため、この地は暑くてたまらないらしい。ならばなぜこの時期にやってきたのかと訊ねれば六番目にあいさつをとのことだった。無理をしなくてもよかったのにと唇を尖らせた六番目に、務めだからとヤマイヌは笑った。

「なあ、シロ。シロは淋しゅうないか？」

ヤマイヌを見送った後、六番目はふと白鬼に訊ねた。

「昨日の話、ちょっとだけ聞こえてな。淋しくなる、ってよおったから。シロは、淋しいんか？ 淋しくなるんか？」

必死に問いかける六番目に、白鬼はしゃがみこんで六番目に視線を合わせると、そつとその小さな体を引き寄せた。

「淋しくはないよ。ここには私がいて、お前がいて、山がある。ずつと変わらない」

それに安心したように笑った六番目の口から、ふわ、と欠伸が漏れる。白鬼はくすりと笑んだ。立ち上がると六番目の手を取って寝床へと向かう。

「シロは……、眠う、ないんか？」

歩きながらもまどろんでくる眼をこすりながら、六番目は白鬼に訊ねる。最近はずぐに眠たくなる。朝もなかなか起きれないし、昼間動物たちと遊んでいるときでさえ気が突いたら寝てしまっていることもある。

それに比べ、白鬼はいつ寝ているのか全く分からなかった。六番目が寝るまでそばにいてくれるし、六番目が目覚めれば白鬼はすぐに起き、寄り添っていてくれる。少し前に夜中に起きてしまったときでさえ、白鬼は眼をぱちりと開けてそこにいた。

「……私は寝なくても大丈夫なんだ。ロクはゆっくりお休み」

今のうちなのだからと呟かれた声が遠くなり、歩いている最中だというのに六番目は眠ってしまった。倒れそうになる身体を抱きかえ、白鬼は巨大な樹木の下に六番目を寝かせる。

白鬼はその樹木に触れ、そつと額を押しあてた。

六

六番目が山へと出され、ふた月が過ぎようとしていた。母は日に日に痩せ劣り、家事は娘にまかせつきりになっていた。誰が何を言おうが頭を振り黙り込み、かと思えば突然喚きだす。そんな母を父は何度も殴った。

「何度言えば分かる。六番目は山のもんじゃ。生まれる前から決まっとったことじゃろう！」

「あん子は私の子じゃ。私が腹あ痛めて産んだ子じゃ。返してくれ、返して、ロクう！」

返して、返してと母はひたすらに喚く。父はつくった拳を下ろし、深いため息をついた。何を言っても聞かないだろう。放っておくのが一番だと結論付けた。

しばらくして、父が出て行った、もとは六番目が使っていた部屋に今度は一番目が入ってきた。うなだれる母の肩に手を置き、そつと母の言葉を聞く。六番目を案じていた唯一ともいえる存在だからこそ、一番目は母の気持ちが痛いほどわかった。

「イチ……。あんなええ子は他におらんのんよ。ああ、ああ、返して。ロク、ロク、あああ……」

「かあさん、ロクが山ん行って、もうふた月じゃ。ロクは、もう帰ってこん」

つらいのは同じだ、けれどももう諦めなければならぬのだと、何とか一番目は諭そうとする。だが、母はやはり頭を振るばかりで、顔をあげようとはしなかった。やはりだめかと一番目が小さく息をついたとき、母が何やら呟きだした。

「ああ、憎い……、私からロクを奪った山が、鬼が憎い……。生きとらんでもええ。ただ、あん子を奪った鬼が憎くて、恨めしゅうてたまらんのんじゃ」

言ったかと思うと母は急に顔をあげ、一番目にすがりつく。

「なあ、イチ、頼む。鬼を殺してくれ。ロクを奪った鬼を、殺してくれえ！ 鬼が生きたる限り、私や諦められんのんじゃ！」

頼む、と掴んだ袖を揺さぶらる。母の気迫に一番目は茫然としてしまった。母の気持ちは分かるはずだった。けれど、一番目の想像を超えて、母は六番目を恋しがっている。神である鬼を……、屠れというほどに。

「かあさん、それは……」

「なんね、あんたまで鬼の味方をするんか？ みんなみんな怖がつて……」

ひとしきり叫んだ後、母は何を思ったか急に走り出した。一番目が慌てて追いかけると、母は包丁を持ち出し山へと駆けて行こうとしていた。それを後ろから押さえつける。母が喚き、振り回す包丁をはたき落とし、一番目もまた、叫んだ。

「かあさん、鬼を殺したからってなんもならん！ 鬼がおらんかったらこの里はどうなるんじゃ。六番目が行ってすぐに雨が降ったんは、母さんだつて知つとろうが」

六番目が山へと駆けだしてすぐに降り出した雨は里へと恵みをもたらし、これまでも安定した天候を与えてくれている。それは鬼の

存在と、供物が必要であるということを信じさせるには十分だった。

「誰も手を貸してくれんのなら私が一人で行って殺してやるんじゃない！ イチ、離しい。鬼を、鬼を……！」

「おりよう！」

騒ぎを聞きつけた父がやってきて、母の頬を打つ。暴れていた母は糸が切れたかのように動きを止めた。呆けた目で、目の周りを赤くする父を見る。

「何をゆうとんじゃ。ええ加減にせえ」

「……あんたには、わからん」

母の唇が震える。怒りか、哀しみか。一番目には判断がつかなかった。

「なんで、なんであんなええ子が取られにやならんかったの。会うことも……、触れることもほとんどできんで、取られてもうた。これ以上自分の子おをなくすんは嫌じゃ！」

憎い、と母は繰り返す。それに父はため息をつき、母ではなく一番目に告げた。

「イチ、母さんを部屋に連れて行け」

「父さん……でも」

「……長たちと話す。母さんから離れんようにな」

一番目はこくりと頷き、うなだれる母を連れていった。周りではほかの兄弟が心配そうにこちらを見ていた。

「すみません、長」

「いや、いい。母が子を求めるのは、子が母を求めるのと同じで、当然のことじゃ」

夜、里の男たちだけで集まっていた。議題はもちろん、六番目の母についてだ。

「神殺しなどあつてはならぬ。おりようには気の毒だが、どうしようもない」

「しかし、あのままではおりようがどうなるか……」

「失礼します」

話し合いが行われている途中、一番目が室内へと入ってきた。

「イチ……。母さんは」

「ミツに預けてきた」

驚きに目を開き声を漏らす父に答えて、一番目は座り、長へと目を向けた。床に手をつくと深く頭を下げる。

「お願いします。どうか、母の願いを叶えたってください」

長は静かに息を吐き、一番目に先を続けさせた。一番目は顔をあげて続ける。

「母はこんなまじゃあ狂っちゃいます。俺も、六番目のことは悔しゅうてなりません。鬼を殺さんでもええ。六番目を連れ戻せれば、

ええんです」

「イチ、六番目は……」

「ロクは生きとうよ」

咎めようとする父の言葉に、一番目は即答する。ただのカンでしかなかったが、一番目は確信していた。

「もし六番目が鬼に喰われとったとしても、それでええんです。鬼が死んだかどうかなんて、母にはわかりません。じゃから、男たちで山ん中を捜すだけでも、お願いします」

一番目はもう一度、深く頭を下げた。それに対し長を含む男たちはふむと頷きを交わす。

「すぐにとはいけません。今は大事な時期ですけえ、山に気をかけとる暇はありません。じゃから、収穫も祭りも全部終わった後でええんです」

「確かに……。そんなら山は裸になる。力が衰え、新たな力を蓄えるため眠りに就く時期じゃからな。邪魔も少なかろう」

ざわざわと男たちの声が聞こえ出す。長はそれらに頷き、一番目を向いた。

「あいわかった。そろそろ儂らも決断をせねばなんのかもしれない。わしらは山に守られ、甘えすぎた。そのせいでこの地に縛られ、子を亡くした母が悲しんでいるのなら……、考えねばなんのだろう」

「長……それじゃあ」

「おりょうの言うとおりにしよう。たとえ鬼から六番目を取りかえたところで、また新たな子を選ばれるだけじゃ」

一番目はぱつと顔をあげ、長を見る。その目が確かな決意に満ちているのを見て、一番目はまたもや頭を下げた。床に額が突くほど深く、しっかりと頭を下げる。

「ありがとうございます……！」

隣では父が同じように頭を下げていた。なんだかんだと言いつつも、父も母を心配していたのだろう。

そうして里は動き始めた。六番目を喰らった、鬼を屠るために。

七

呼ばれた気がして、六番目は眼を覚ました。ロク、と聞きなれない高く掠れた声が自分を呼んでいる。それが母の声であると気づくの、そう時間はかからなかった。

山の中の少し開けた、里が見える場所へと移動する。あまりにも小さくてどれが誰であるかは分からなかった。ただ、あそこには自分を呼ぶ母がいるのだ、と。六番目は里から目を離すことなくじっと見入っていた。

ロク、また、声が聞こえた。けれどそれは母のものではないようだ。

「……戻りたいか」

振り返れば、いつの間に来たのやら、白鬼が六番目の様子をうかがっていた。白鬼の問いに六番目は頭を振る。

「おつかあのことは気になるけど、戻りたいとは思わん。おれの家は山だけで、おれの家族はシロだけじゃ」

そう言つて六番目は白鬼の着物の裾を握る。視線でそうだろう、と問いかけると、白鬼は薄く笑い頷いた。

山では緩やかに時が流れる。何も変わらないようで、山は急速に変化を続ける。それは白鬼はもちろん、六番目もよく分かっていたけれど、それでも変わらないと思っていた。だって、山の姿がどれだけ移り変わろうと、山に変わりはないのだから。変の不变。それは自分たちも同じなのだと。きっと、それを思っていたのは六番目だけなのだろうけど。

そうして今日も、眠りに就く。

どれくらいの間眠っていたのだろう。最近ではほぼ一日中寝
ていて、起きていることのほうが少ない。もしかしたら二、三日寝
続けていることもあるのかもしれない。ここには時間を知るすべが
太陽しかないから、暦がいつであるかなんて六番目には分からな
かったし、知る必要もなかった。山の様子を見れば、大体の季節は分
かる。

最近ではめっきり冷え込んで、手足が冷たくなってきた。山の木々
も葉が落ちてみすばらしい姿になってしまったし、時期に冬がやっ
てくるのだろう。

むくりと起き上がってから、六番目は違和感を感じた。何が、と
はつきりしたものは言えないけれど、何かがおかしい。

「……シロ？」

赤くなった手をこすり温めながら、六番目は白鬼を呼び掛けた。
白鬼がいつもそばにいるわけではなかったが、六番目が起きるとい
つもどこからともなくやってくる。呼びかけても姿を現す気配がな
いというのは、どうもおかしかった。

ガザガザとシダや下草が揺れる。動物たちも姿を現さない。裸に
なった木たちも、どこか緊張しているようであった。

（シロに、何か、あった！）

山の主である白鬼に危険なことがあるとは思えなかった。けれど、
六番目の頭にはそれしか浮かんでは来ない。そして、それは間違い
ではないのだと、頭のどこかで確信していた。

六番目は走った。どこにいるのか分からない。けれどただ、がむしやらに走った。六番目にとって白鬼は、唯一の家族で、何よりも大切な存在だったから。

走って、走って、走っているうちに、六番目はようやくこの違和感は何なのか気が付いた。ヨソモノが山に入りこんでいるのだ。だからこんなのも胸がざわついて、自然と眉根が寄ってしまうほどの不快感を得ているのだ。

岩を飛び越え、木の根を跨ぎ、下草は勝手に六番目から避けていく。それでも六番目の息が乱れる気配がない。この半年ほどで、六番目には体力がかなり付いていた。それに、何かが力を与えてくれているようにも思う。何か、が何かなんて、六番目には分かり切っていた。

ガザッと音を立てて、六番目は獣道に入り込む。とそこで半年前まで見慣れていた姿があった。ニンゲンだ。不快感に顔がゆがむのも気にせず、六番目はそのニンゲンに言葉を掛けた。

「……イチにい」

「ロク」

突然現れた六番目に目を見開いていた一番目は、それが己の弟であると分かると一気に顔を綻ばせた。ロク、ともう一度呼びかけてくる。

「ロク、やっぱり生きとったんか。良かった」

何が良かったのかと六番目は口に出しそうになるのをこらえた。相手は自分を気にかけてくれた存在なのだ。今はどうであれ、少なくとも相手は自分を大切に思ってくれている。

「ロク、帰ろう。かあさんが待つとる」

「……何をしに来た」

思ったよりも低い声が出たことに、六番目自身が驚いていた。声どころか話し方まで自分ではないようだ。これではまるで、と考えて、六番目は息をのんだ。

一番目も驚きを隠せないようで、またもや目を大きく見開き、戸惑い気味に六番目を呼ぶ。

「ロク……？」

「何をしに来たと聞いている、イチにい」

出てくるのはやはり幼子にしては低い声だったが、今度は六番目も驚かなかった。そういうことなのだ。

「……山からロクを連れ戻しに来た。母さんが泣いてお前を待つとる。帰ろう、ロク」

一緒に山を出ようと一番目は呼びかけた。己の仕事はそれなのだから、険しい山道を一步一步六番目に近づいてくる。六番目は動かず、ただじつと一番目の様子をうかがっていた。そこでふと思いついたように、ぼつりと白鬼の名を呼ぶ。

「……シロは？」

その呟きに一番目はぴたりと足を止めると、訝しげに六番目を見た。

先ほど一番目は己の仕事は、といった。ということは他にも役目を請け負ったものがあるということだ。一番目は六番目を捜しに、ならば、他の者はどこに行ったのか。そんなの、考えなくても分かることだ。

「イチにい、シロはどこに行った」

「ロク、シロって誰のことじゃ」

「わかるだろ、シロはシロだ。この山の主だ」

言えば、一番目ははつとした後に目をそらした。

「教えて、イチにい。シロはどこに行ったんだ。何が、起きてる」

言いようのない不安感と気持ち悪さがこみ上げる。何かが起こっているのは間違いない。そしてそれをこのニンゲンは知っている。ああ、気持ち悪い。もっとたくさんのヨソモノが来ているに違いない。ここに在っていいのは、木々と草花と動物と、それから白鬼と六番目だけなのに。

「ロクは知らんくてええ。それより、こっちに来い。山を降りよう。家に帰ろう」

一番目が六番目に触れようと手を伸ばしてくる。嫌だ、と頭の中で叫びがあがった。口からは零れなかった嫌悪が、体中から溢れだす。身体が熱い。そう思った刹那、バチンツと音がした気がした。はじけるような感覚にきつく閉じていた目を開けば、少し先で一番目がうずくまっていた。先ほどまで確かに目の前にいたはずなのに、と六番目は困惑する。

一番目は腕を抑えていた。そこからは目が痛くなるほど赤い鮮血がにじみ出している。それは、六番目がやったことなのか。一番目はもちろん六番目にすら何が起こったのか分からず、その場に硬直していた。ただらと血が地面に垂れ落ちる。それを見て六番目は山が穢れてしまったと山にそつと謝った。山からは気にするなと眠たげな声が返ってくる。それにもう一度謝ってから一番目を見ると、

一番目は六番目をきつく睨みつけていた。血走ったその眼にゾクリと嫌悪とも悪寒ともつかない気持ち悪い何かが走る。気づいてしまったのだ、六番目も、一番目も。

六番目は再び走り出した。もう一番目の答えを待つ必要などない。急な六番目の行動に一番目ははっとし、追いかけてこようとするとシダが一番目の足を取り、木々が一番目の道をふさぐ。開かれたと思った道は六番目が過ぎれば瞬く間に閉じていく。それでも一番目は追いかけてこようとしたり。なんて義理堅いのだろうか。先ほどまであんなに睨みつけていた相手を、それでも弟として連れ戻そうとするなんて。

六番目は動かしていた足を止め、下にいる一番目へと声をかける。

「もう、追わんでくれ」

それは先ほどまでとは違う、ロクの声だった。ぜいぜいと息を切らす一番目に、分かるだろうと問いかける。

「イチにい。おれはもうロクじゃない。おつかあの子でも、イチにいの弟でも、……人の子でも、ない」

困ったように笑み、おそらく最後になるであろう、ロクである自分を一番目に見せた。

「おれはもう　鬼ん児じゃ」

そう言うと、六番目はずっと瞳を細める。ぞくり、と一番目の背筋に、えも言われぬ何かが走った。

「去ね。ここは主とおれの山だ。お前がが立ち入って良い場所ではない」

言うや否や、六番目は踵を返しまた走り出す。行くあてはない。けれど自分はいかなばならない。白鬼が白鬼で、六番目が六番目であるからだ。たった一人の家族だからだ。

走って走ってたどり着いた先は、白鬼の大事にしている大樹のもとだった。もう冬だというのに、その木だけは大きく葉を茂らせている。寒くなってきたからと、最近はめっきり近づかなくなった大樹のもとにも、白鬼はいなかった。けれど、すぐ近くから嫌なおいがする。六番目は鼻に皺を寄せ、匂いのするほうへそりと近づいてった。

大樹から離れ、少し下ったところに白鬼はいた。たくさんの里のニンゲンたちに囲まれて、白銀の髪がちらちらと揺れて見える。ニンゲンはみな男で、大人と呼ばれるものたちのようだった。六番目が見たことのある者もいる。ニンゲンはみな一様に、手元に何やら物騒なものを持っている。話し合うような雰囲気は、全くない。何をしようとしているのか、幼い六番目の頭でも容易に分かった。

気付いた六番目はその場に飛び出そうとする。が、ふと合った金の瞳に、足が動かなくなった。来なくていい、というよりは来るな、といったその鋭い目に、六番目は困惑した。

どうして白鬼は抵抗しないのか。六番目でさえ拒絶したというのに、あんなにたくさんのニンゲンに囲まれて、苦しくはないのだろうか。白鬼ならば、たとえ山が眠りに就こうとしても、ニンゲンたちを追い返すことくらい簡単はずなのだ。いや、それ以前に、ここまで入り込むこともできなかったはずなのに。

「シロ……?」

呼びかけた声はあまりにも小さく、届く前に霧散してしまう。揺れる瞳の先で、ふと、白鬼が笑んだ気がした。ゆるく細まった金色があまりにも綺麗で、小さな月があるようだと思った。そうだった、初めて見たときも、月のようだと思ったのだ。薄く弧をかけた唇が、六番目を呼んだ。

六番目が目を奪われている間に、ニンゲンたちは動いた。ぐわりと腕と大きな凶器を持ち上げる。よく見ればそのニンゲンは見たことのある顔だった。

視界が、赤く染まる。一番目と同じ、きっと自分ともそこにいるニンゲンたちと同じ、赤が散る。けれど何よりもキレイだと思った。濁りのない、穢れのない、同じ赤が、散る。

「……ついやだあ！　しろ……、シロお！」

思わず叫んでいた。その瞬間、赤かった視界が真っ白になる。すべてが白く霞んで、だんだんと見えなくなる。

額が熱い。身体が熱い。まるで焼けるようだった。

何も見えない。白、しろ、シロ。一對の小さな月だけが、じっと六番目を見ていた。

次第にそれさえも消えて、なにも、分からなくなった。

おしまい

気がついたら、すべてが消えていた。ぼうつと辺りを見渡して見えるのは、木と、草と、地面と、山だけ。それ以外すべて、なくなっていた。それ以外すべて、消えていた。たくさんのニンゲンも、その気配も、嫌悪感も、シロも。

「……なくなった」

ぼつりと六番目は零す。白鬼はどこに行ってしまったのだろうか。つい先ほどまでそこにいたのに、痕跡すらない。山の中にいるという気配さえ、感じられなかった。

「シロ……、どこ行ったんじゃ……？」

ゆっくりゆっくりと、六番目は山道を登っていく。見当たらない白鬼の気配を捜して、彷徨い続ける。

白鬼はどこへ消えてしまったのか。なぜ自分の目の前からいなくなってしまったのか。もうここにはいないのだろうか。どうして置いていったのだろうか。六番目にとって、白鬼は唯一であったというのに。

（ずっと一緒だと、言ったのに）

六番目はそれでも白鬼を捜し続けた。ふらふらと歩いていると、動物たちが顔を覗かせる。一番の仲良しである子猿のナナがここからとなく現れ、六番目の肩に乗る。やわらかな毛を六番目の首にこすりつけて、嬉しそうに鳴いた。

ぬしさま。

子猿はそう鳴いてさらにすり寄ってくる。

主様、それは山の動物たちが白鬼を呼ぶときに使っていた呼び名だ。そばに白鬼がいるのだろうかと辺りを見渡すが、やはり見当たらない。

ふと見上げれば、白鬼が大切にしていた大樹があった。じい、と空へと広がる枝葉を見上げていると、風が六番目の頬をなでた。

風がすすすと葉っぱを揺らして過ぎていく。地面がごうごうと唸りを上げる。地に触れた手は、わずかに震えていた。耳を近づければ、唸りがはつきりと届く。やさしく、響く。

「……ああ」

大樹の幹に触れ、そつと撫ぜる。

「ここに、いたのか……」

触れたそこから伝わるぬくもりは、白鬼のそれと違いなかった。短い腕を回し、ぎゅう、と幹につかまる。こつんと額をぶつけると、あの細い指に頭を撫でられた気がした。指はすぐに離れ、代わりにふわりと欠伸のような風が吹く。次第に柔らかくなる風は寝息のようで、響く地面はいびきのようだった。

「……そうか、ようやく、眠れたのか」

ゆつくりと木肌を指で撫ぜ、六番目の白鬼はくすりと笑った。

「おやすみ、シロ」

白髪の鬼に答える声はなく、ただ穏やかな風が通り過ぎるだけだった。

(これから、おれが守っていくから)
(シロは、ゆっくり休んで)

おしまい（後書き）

誤字脱字、文章等おかしな点がございましたらご連絡ください

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2371m/>

おにのこ

2010年10月13日22時17分発行